

附属と連携した授業力向上の取り組み 2：教科指導力高度化演習

保健体育・日野克博

1. 授業の取り組み

平成 22 年度から大学院の授業科目として、「教育現場等のフィールドを積極的に活用して，高度な実践的指導力を獲得する」ことをねらいにした教科指導指導力高度化演習（前科目名はフィールド演習）を開講してきた。保健体育では，附属学校と連携を取りながらこの授業を進めてきた。今年度は「地域社会を核とした教育と研究のつながり」の観点から，附属と連携した取り組みについて報告する。

2. 附属との共同研究体制

これまで，「特別支援学校の体育授業を創造する」のテーマのもと，大学院生が特別支援学校の体育授業を構想・実践する取り組みを行ってきた。今年度は，附属の研究とも関連をもたせ，大学院生，附属教諭，大学教員が三位一体となって共同研究に取り組み，大学院生もそれに参画した。

附属特別支援学校では，1 月末に研究大会を実施している。今年度，中学部の生活単元学習で「とくしんピック 2020」を授業公開することになり，大学院生はその単元のなかの「ボッチャ」と「アキュタンス」の種目の技術指導を担当した。さらに，大学院生は，研究大会の公開授業に向けた授業サポートや学習支援，さらに，研究大会当日の授業にもスタッフの一員として参加した。

3. アクション・リサーチによる研究の推進

「とくしんピック 2020」の授業実践にむけて，大学院生，附属教諭，大学教員が定期的にカンファレンスを実施し，全体計画→実行→評価・計画の修正→実行→評価・計画の修正を繰り返しながら授業研究を進めていった。

図 1，2 は，カンファレンスや院生の授業提案の様子である。こうした会を年 5 回（5 月，9 月，11 月，12 月，1 月）実施した。このカンファレンスのなかで，大学院生は担当授業の指導案や教材

等を発表し，附属教諭から指導助言をもらい，修正や改善を図っていった。また，附属の研究に参画し，院生として意見や考えを述べる場を与えられた。さらに，授業実践に関する打合せや準備，終了後のリフレクションや次時への授業改善等については，その都度，必要に応じて実施された。



図 1. 附属教諭とのカンファレンスの様子



図 2. 小中特支 合同カンファレンスでの発表

4. 大学院生による授業実践

大学院生は保健体育を専攻している。そこで，専門性を活かすことで共同研究に貢献することを実感させるために，「とくしんピック 2020」の種目である「ボッチャ」と「アキュタンス」の技術指導を大学院生が担当した。授業は「ボッチャ」で 1 コマ，「アキュタンス」で 1 コマ，さらに，効果測定のためのデータ収集（VTR 撮影）もあわ

せて行った。これらの授業は、大学院生が主導で実践した。

図3は、測定の様子である。生徒の実態を把握し、そこから課題を見付け、指導内容を検討した。特別支援の生徒に対して、「膝でリズム」「中指の先にジャックボール」「ボールは山なり」といったわかりやすく、意識しやすい指導内容を提示していた。図4は、その指導の様子である。



図3. 実態把握・効果検証のための測定



図4. ボッチャの技術指導

5. 幼・小・中・高・特支が連携した取組へ

今年度は、大学院生の教科指導力高度化演習の取り組みからスタートし、附属との共同研究へ発展していった。昨年度までは、附属特別支援学校の生徒のみの実践であったが、附属との共同研究のなかで、校種を越えた取り組みへと広がり、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の各附属校園が交流学习を実施し、大学院生もそれらに参加した。図5は、特別支援学校、中学校、幼稚園が相互に交流した附属特別支援学校の研究大会の様子である。大学院生もスタッフの一員として授業の運営に携わった。



図5. 研究大会の様子 (↑大学院生)

6. 地域社会を核とした教育と研究のつながり

本年度は、附属校園と連携しながら大学院生の実践的指導力の向上と附属校園の研究推進について、大学院生にも参画させた。表1は、大学院生のコメントの一部である。大学院生は、特別支援の生徒への指導を通して、特別支援に限らず、汎用的・基礎的な指導技術の重要性を自覚したことが伺える。また、共同研究に参画することで、「様々なコミュニティと関わることの重要性」を実感したようである。その経験は、今後の(将来の)教員生活の礎になるものと言える。今後も、教育と研究のつながりを視野に、今後も教科指導力高度化演習の授業改善に努めていきたい。

表1. 大学院生のコメント

- ・ ボッチャの授業実践を通し、授業前・授業中の教師の「マネジメントの工夫の重要性」を学びました。というのも、理解度に差のある特別支援学校の生徒達に、活動内容や自分の行う活動を理解させるためには、声での指示だけでなく「視覚的な支援」が必要であると感じたからです。今回は特別支援学校生徒の授業として、様々な「視覚的な支援」を考案しましたが、このような工夫は一般校生徒の授業でも同じく重要であると感じました。
- ・ 高度化演習で実践した授業や測定では、教具などを活用して様々な配慮・工夫をした。この配慮・工夫というものは特別支援学校だけでなく、通常学校でも必要とされているものである。授業などを考える際に内容ばかり吟味するのではなく、手段や方法について考えることの必要性を改めて認識する機会となった。また、今回多くの先生の協力があって授業や測定を実施することができた。教員間で情報共有することは非常に大切なことであった。